

独歩の自然描写に挑む

文人の 武蔵野

大岡昇平が「武蔵野夫人」を世に出すとき、国木田独歩の「武蔵野」を強く意識していました。同じく武蔵野の自然を描いた作品として、意識せざるを得なかったとも言えます。

独歩をライバル視していたことについては、この連載の別の回でも触れたように、大岡自身が明確に述べています。ここでは、大岡の発言で

大岡昇平 ⑨



国木田独歩（国立国会図書館「近代日本人の肖像」から）。大岡は独歩の名作「武蔵野」を強く意識した

はなく、「武蔵野夫人」の本文をとりあげて、実際、作中ではどのように独歩作品と格闘しているのか、具体的にみてみたいと思います。たとえば次のような箇所には、独歩

に対する異論が直接的に示されています。

「『山林に自由存す』と歌った明治の詩人の句が思い出された。しかし熱帯の山林を

独り彷徨したこのある彼は、自由がいかに怖ろしいものであるかを知っている。明治の詩人にとって瞑想を伴奏する檜の快い緑の諧調も、今彼は薪の材料としか映らな

いのである。人間の手を加えずしてこれほど檜ばかり密生するとは考えられない。」

「『山林に自由存す』と歌った明治の詩人」は、国木田

独歩のことを指します。ビルマから帰還した復員兵である

「勉」の視点を通じて、「山林に自由存す」とする自然観への違和が示されます。

熱帯の山林を知る者の立場からすると、「自由」のある

「山林」とは真に怖ろしい存在であり、「山林に自由存す」

などとロマンチックに歌ってみせる独歩は、本当の自然を知らずして偽りの自然を謳っているのではないかと、疑問を投げかけているようでもあります。

しかしどうでしょう。そもそも「山林に自由存す」の「山

林」が武蔵野だけを指すのではないことについては前にも触れましたが、ボタンのかけ違いはそれだけではありません。

独歩の「武蔵野」では、武蔵野の林が北海道の「大森林」とは根本的に異なることに言及されています。「武蔵野夫人」に書き込まれた武蔵野の林は

ビルマの熱帯林を踏まえたものでしたが、「武蔵野」の林は北海道の原生林を踏まえたものでした。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。



過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。